

愛着障害の理解とかかわり方

2025年10月28日(火)

令和7年度沖縄県公立幼稚園・こども園会/園長会研究大会(島尻大会)

沖縄大学福祉文化学科 / 沖縄大学大学院現代沖縄研究科

名城健二



沖縄大学
OKINAWA UNIVERSITY

本日の主な内容

- I . 愛着理論
- II . 愛着障害(愛着の課題)
- III. 愛着障害と発達障害(発達の特性)の類似点と相違点
- IV. 愛着障害のある子どもの対応

県内小中の特別支援学級数と児童生徒数



琉球新報記事 2022年12月9日

○ 小学校特別支援学級の児童数・学級数

	児童数		
	令和2年	令和3年	令和4年
知的障害	2065	2211	2308
言語障害	109	132	193
自閉症・情緒障害	3187	3554	3898
肢体不自由	53	67	56
病弱・身体虚弱	53	57	60
弱視	6	5	5
難聴	31	31	31
合計	5504 (835▲)	6057 (553▲)	6551 (494▲)

	学級数		
	令和2年	令和3年	令和4年
	363	393	397
	45	53	60
	515	553	597
	40	45	43
	39	44	46
	6	5	5
	24	22	25
	1032	1115	1173
	(125▲)	(83▲)	(58▲)

令和4年度 沖縄県特別支援教育の現状
沖縄県特別支援教育研究会会長大城正之 資料

○ 中学校特別支援学級の児童数・学級数

	生徒数		
	令和2年	令和3年	令和4年
知的障害	830	941	993
言語障害	12	5	7
自閉症・情緒障害	990	1235	1415
肢体不自由	22	13	17
病弱・身体虚弱	21	33	30
弱視	4	4	4
難聴	15	15	12
合計	1894 (215▲)	2246 (352▲)	2478 (232▲)

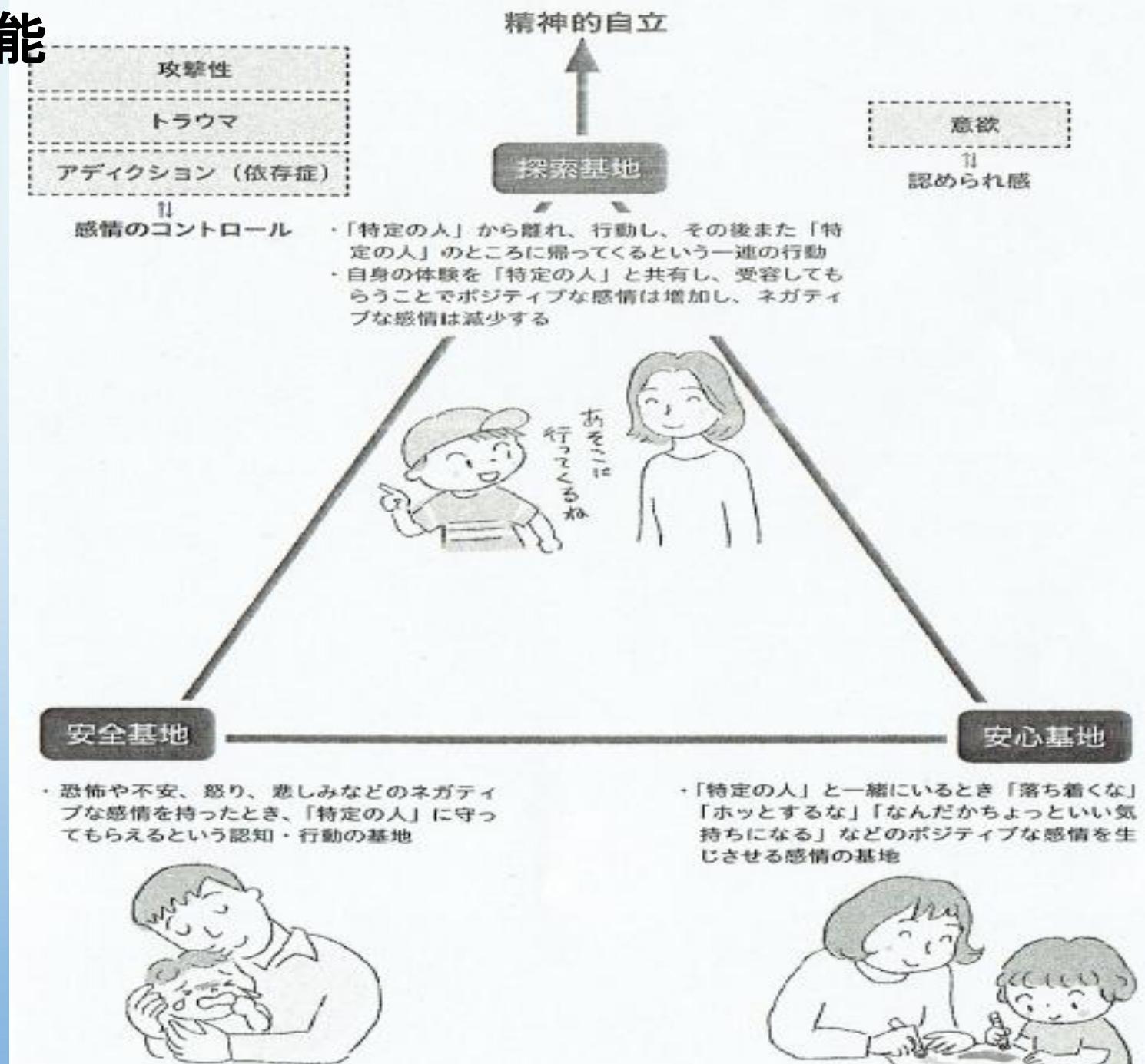
	学級数		
	令和2年	令和3年	令和4年
	158	173	184
	10	4	6
	186	221	230
	12	13	16
	16	25	20
	4	4	4
	12	13	12
	398 (40▲)	453 (55▲)	472 (19▲)

I . 愛着理論

人と人との親密さを表現しようとする愛着行動についての理論である。子どもは社会的、精神的発達を正常に行うために、少なくとも一人の養育者と親密な関係を維持しなければならず、それが無ければ、子どもは社会的、心理学的な問題を抱えるようになる。愛着理論は、心理学者であり精神分析学者でもあるジョン・ボウルビイ(1907年～1990年)によって確立された。

愛着理論では、幼児の愛着行動は、ストレスのある状況で対象への親密さを求めるために行っていると考えられている。幼児は、生後6ヶ月頃より2歳頃までの期間、継続して幼児の養育者であり幼児と社会的相互作用を行い幼児に責任を持つような大人に対して愛着を示す。この時期の後半では、子どもは、愛着の対象者(よく知っている大人)を**安全基地**として使うようになり、そこから探索行動を行い、またそこへ戻る。

○愛着形成のための3つの機能



愛着とは

- 💡 Point ! · 愛着とは「特定の人と結ぶ関係」です。
· 「特定の人」とは「親」とは限りません

愛着とは

- ① 「特定の人と結ぶ情緒的な（こころの）絆」です。
- ② 「特定の人」とは「親」とは限りません。
- ③ 愛着関係は「親でなければ結べないもの」ではありません。

“愛着形成”の3つの機能

- ・ 特定の人と愛着を形成することにより、人は次の3つの基地を得ます

安全基地

- ・ 恐怖や不安、怒り、悲しみなどのネガティブな感情を持ったとき、「特定の人」に守ってもらえるという認知・行動の基地。

安心基地

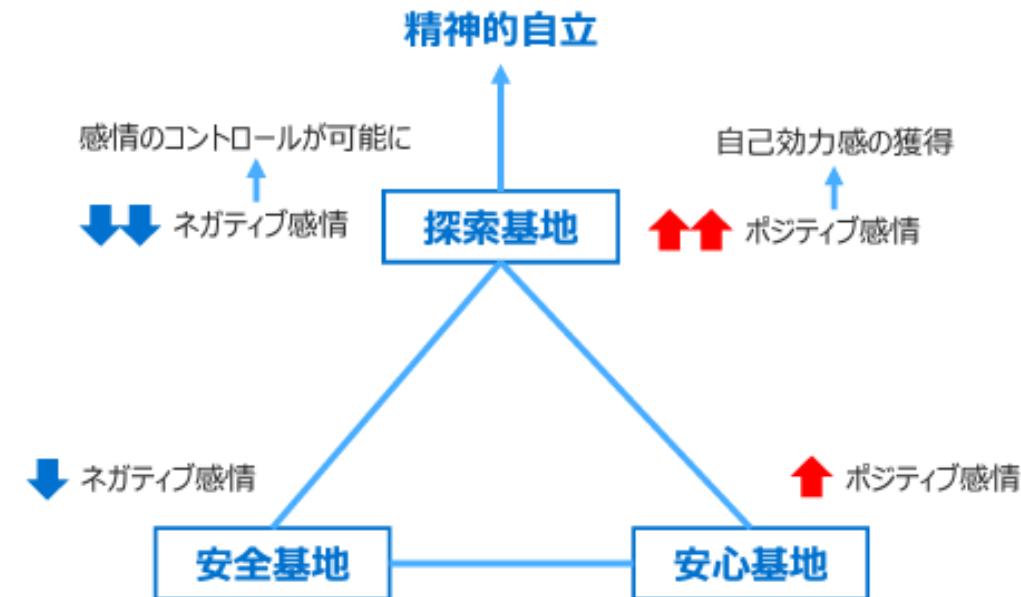
- ・ 「特定の人」と一緒にいるとき「落ち着くな」「ほっとするな」などのポジティブな感情を生じさせる感情の基地

探索基地

- ・ 「特定の人」から離れ、行動し、その後また「特定の人」にところに帰ってくるという一連の行動。
- ・ 自身の体験を「特定の人」と共有し、受容してもらうことでポジティブな感情は増加し、ネガティブな感情は減少します。

愛着を形成できるとどうなるのか

- ・ ネガティブな感情から守ってくれる「安全基地」とポジティブな感情を生みさしてくれる「安心基地」を土台に、自立活動で生じたポジティブ感情を増やし、ネガティブ感情を減らしてくれる「探索基地」が形成されることで自己効力感と感情コントロールの方法が身につき、精神的自立が可能になります。



(参考) 米澤 好史：愛着障害は何歳からでも必ず修復できる.合同出版.2022, pp8-40

愛着とは

特定の人に対する情緒的な心の絆

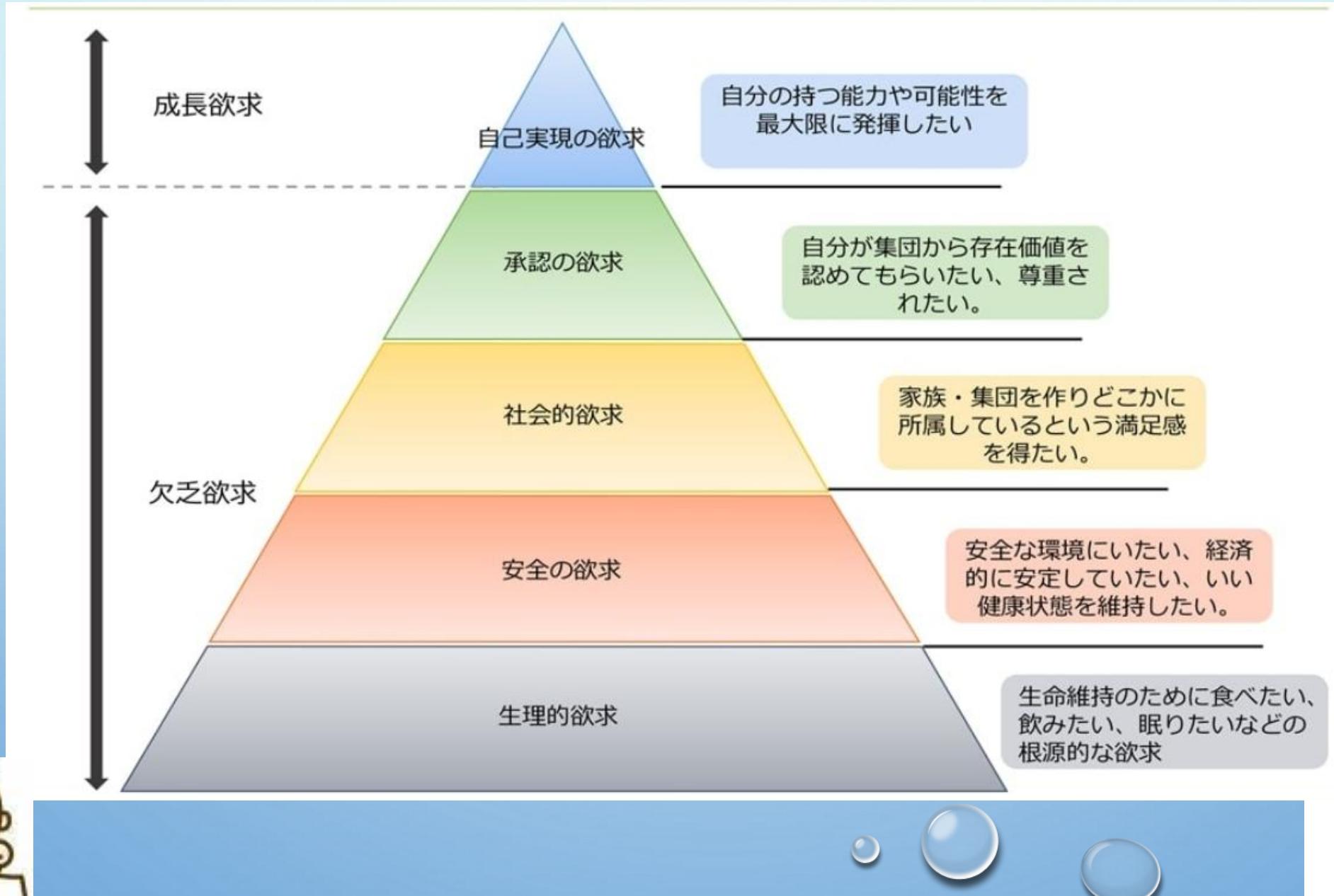
愛着形成は誰とでも結ぶことができる

**愛着形成は
抱っこから始まり
生涯発達する**

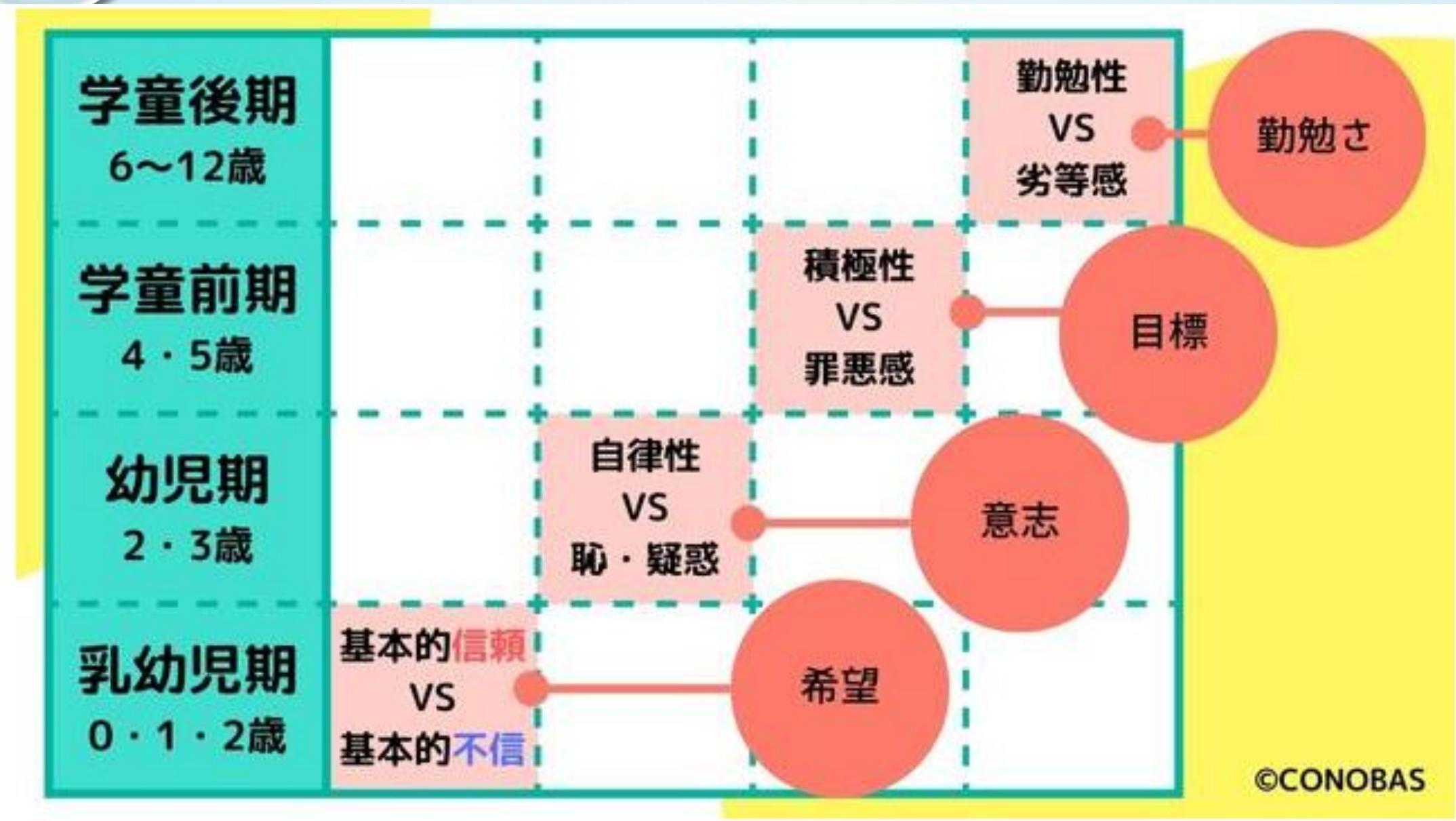
個体がストレス状況、あるいは脅威に晒された際に、不安や恐怖といった不安定な心的状態を、特定の他個体にくつつく(attach)ことで回復させようすることにあります。つまり、アタッチメントとは、本来的には、特定の他者との物理的な近接性を調整することで、乱れた情動を常態へと復帰させ、個人の心の安寧を図るためのシステムであると考えることができる。

オキシトシンは、出生過程において大量に分泌されるホルモンであり、また、他者との良好な関係が形成されているときにも分泌されやすい物質です。さらに、オキシトシンは、サポートやケアを受けている際にも分泌されやすく、免疫反応を強め、身体的な痛みを軽減するとともに、二者間の信頼の醸成にも寄与することが知られている。

○マズロー(1908年～1970年心理学者)の欲求5段階説



○エリクソン(心理学者、精神分析家:1902年~1994年)の発達段階論



愛着は、特定の大人との親密な関係で形成されていく。特定の大人は、母親や父親が好ましいが、祖父母や身内の大人、地域の人、学校の先生、友達、恋人などが代わりになることも可能である。

愛着形成で最も重要な時期は、生後6か月～1歳半とも言われている。

*「依存」と「自立」の関係

○「依存」と「自立」の関係

人は、十分な依存体験をベースに自立に向かっていく。そして、自立しながらも誰かに、何かに依存することで自立が成立する。

乳幼児期に、特定の人に寛容した依存体験ができなかった場合、自らも認識できない大きな不安や恐怖を抱え、その感情を隠すために、何か別の物(者)に不健康な依存をしてしまう。何かに依存することで自分の精神状態を本能的に維持している。

Ⅱ. 愛着障害について

乳幼児期に、養育者(主に母親)との愛着が何らかの理由で上手く形成されず、子どもの情緒や対人関係に問題が生じる状態のことを言う。虐待や養育者との離別などが主な原因で、安心・安全基地を得ることができず、日常的に不安や恐怖などを抱えてしまう。

- ・養育者との離別、死別などで愛着形成の対象がいなくなる
- ・養育者によるネグレクト、無視、無関心
- ・身体的虐待を受けた
- ・養育者が頻繁に替わる
- ・養育者による厳格なしつけ、体罰を受けた
- ・兄弟との差別、優劣をつけられた
- ・褒められることが極端に少ない環境だった

<HTTPS://OSAKAMENTAL.COM/SYMPOTMS/20.HTML>

- * 両親が多忙であったり、きょうだいが多い場合も愛着障害を抱えることがある。
- * 誰でも大なり、小なりの愛着障害がある。

○愛着障害は、大きく分けて「抑制型」と「脱抑制型」の2つがある。

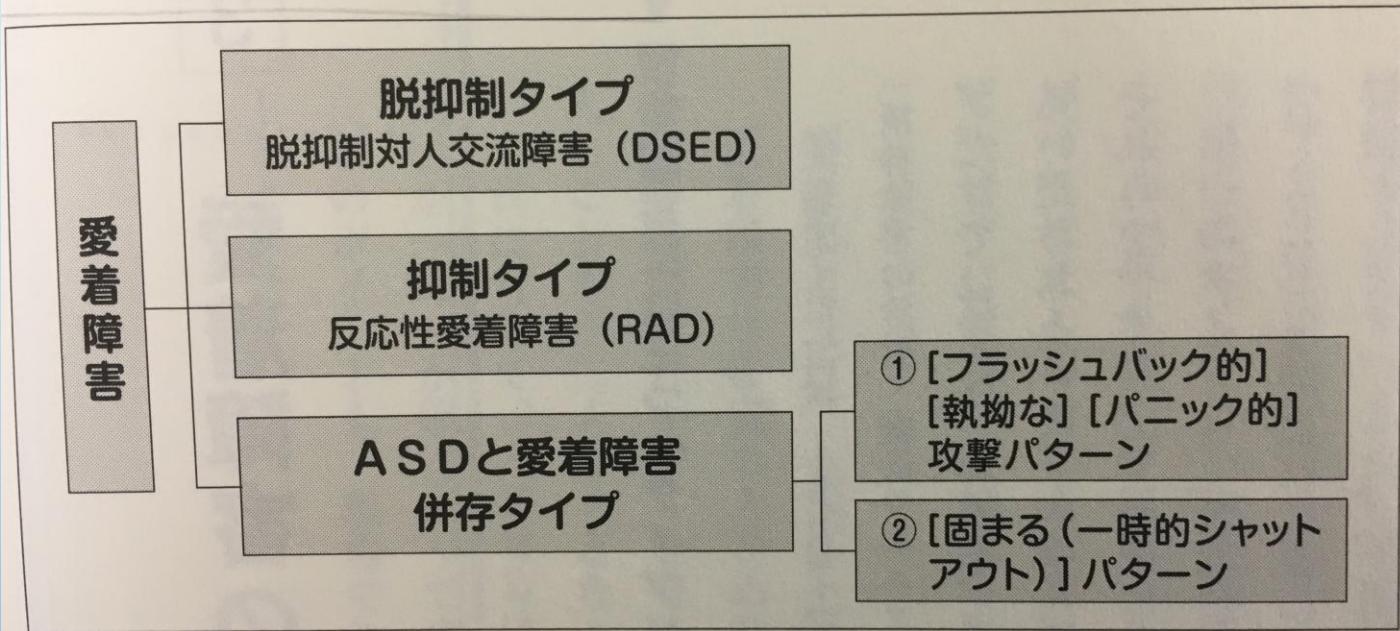
「抑制型」は、文字通り自分を強く抑え込んでおり、周囲に対して非常に警戒心が強く、優しく接してくれることに対して、怒り出したり泣き出してしまうと、素直に嬉しいといった態度を示すことが難しい。本心では、甘えたいと思っていても、それをどう現していいのか分からず、警戒して素直な態度がとれない。

「脱抑制型」は、愛着障害の他者との適切な接し方を知らない部分が、他者と関わる上で、全く警戒せず無分別に近づいてしまうという形で現れる。見知らぬ人に対しても警戒することなく近づいてしまうため、トラブルになることも少なくない。

アメリカ精神医学会の診断と統計マニュアル「DSM-5」においては、「反応性アタッチメント障害／反応性愛着障害」、「脱抑制対人交流障害」として解説されている。

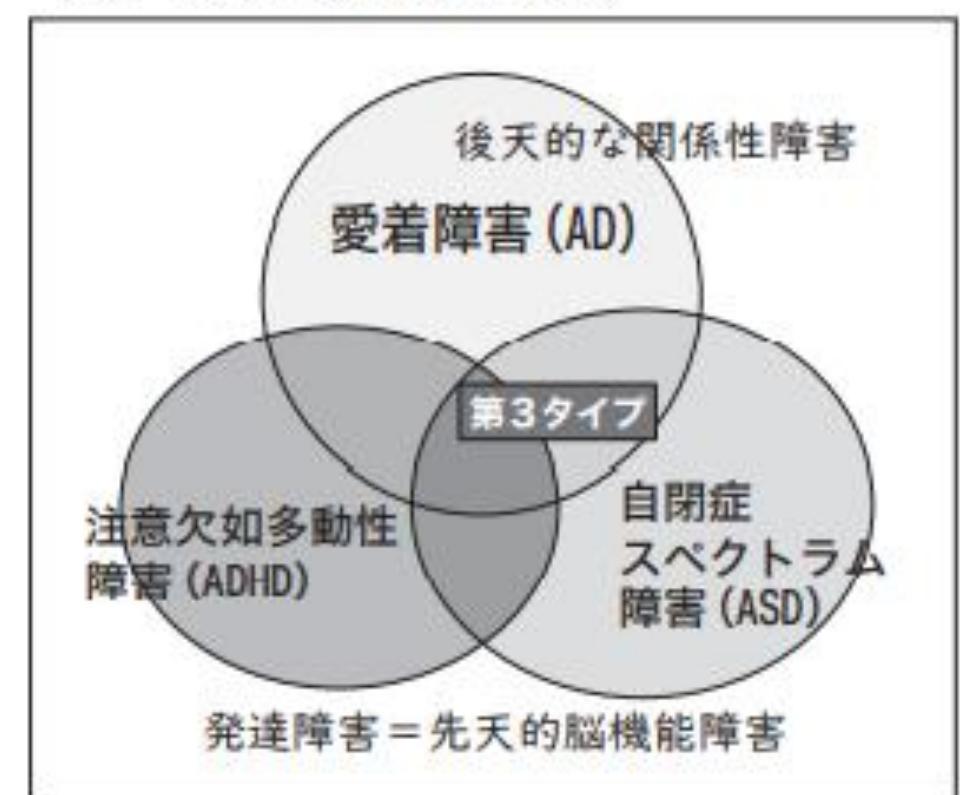
* 愛着障害と発達障害の双方を抱えている人もいる。

図3 愛着障害の3つのタイプ



イプ 第三のして関係です。工で、人地の問題期間は数人間関係ようとにに対しでは、二第二の触した止めて分な安ものが、それが、と思

図2 発達障害と愛着障害の関係



愛着スタイルの4類型

- ・ 愛着スタイルには次の4類型があります。子どもに対しては、「安定型の養育における親の特徴」に倣った接し方をするように心がけましょう。

	子どもの特徴	養育における親の特徴
安定型	<ul style="list-style-type: none">・ 不安なときに養育者などに近接し、不安感を和らげる。・ 養育者を安心の基地として使っている	<ul style="list-style-type: none">・ 子どもの欲求や状態の変化に敏感であり、子どもの行動を過剰に、あるいは無理に統制しようとすることが多い。・ 子どもとの相互作用は調和的であり、親もやりとりを楽しんでいることが伺える・ 遊びや身体的接触も、子どもに適した快適さでしている。
回避型	<ul style="list-style-type: none">・ ある程度までの不安感では養育者には近接しない。・ 養育者を安心の基地として使わない。	<ul style="list-style-type: none">・ 全般的に、子どもの働きかけに対して拒否的に振る舞うことが多いが、特にアタッチメント欲求を出した時にその傾向がある。・ 子どもに微笑んだり、身体的に接触したりすることが少ない。・ 子どもの行動を強く統制しようとする関わりが、相対的に多く見られる
アンビヴァレント型	<ul style="list-style-type: none">・ 全般的に不安定で用心深く、養育者に執拗に接触していることが多く、安心の基地として離れて探索行動を行うことができない	<ul style="list-style-type: none">・ 子どもの信号に対する応答性、感受性が相対的に低く、子どもの状態を適切に調整することが不得意である。・ 応答するときもあるし、応答しないときもある。・ 子どもとの間で肯定的なやり取りができるときもあるが、それは子どもの欲求に応じたというよりも、親の気分や都合に合わせたものであることが多い・ 結果として応答がずれたり、一貫性を書いたりすることが多くなる。
無秩序・無方向型	<ul style="list-style-type: none">・ 養育者に怯えているようなそぶりを見競ることもある・ 始めて会う人に対して親しげで自然な態度をとることがむしろ少なくない。	<ul style="list-style-type: none">・ 養育者が、子どもにとって理解不能な行動を突然とることがある。・ 例えは、結果として子どもを直接虐待するような行為であるとか、あるいは、訳の分からぬ何かに怯えているような行動であるとかする。・ そのような子どもにとって訳のわからない親の行動や様子は、子どもに恐怖感をもたらす。・ そのため、子どもはなすすべがなく、どのように自分が行動をとっていいかわからなくなり、混乱する。

(参考) 数井 みゆき 編著:アタッチメントの実践と応用 医療・福祉・教育・司法現場からの報告.誠信書房.2012,p8を一部改変

III. 愛着障害と発達障害の類似点と相違点

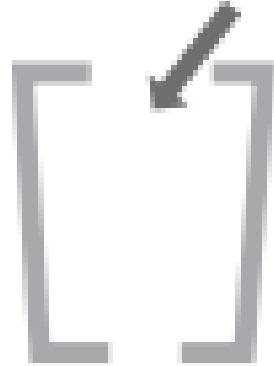
衝動性や多動性は、表面的には同じように見えてもベースにある原因が異なることがある。見立てを間違えると、子どもを傷つけてしまうことにつながる。

『発達障害・愛着障害 現場で正しく子どもを理解し、子どもに合った支援をする「愛情の器」モデルに基づく愛着修復プログラム』
米澤好史 著、福村出版

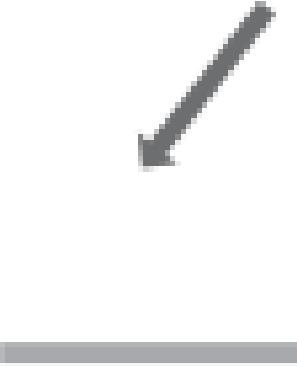
発達障害は、先天的な子どもの脳機能障害であって、それは生まれつきもっている「**特性**」の問題です。愛着障害は、生まれたあとに、後天的に子どもと関わる特定の人との「**関係性**」の障害です。

『愛着障害・愛着の問題を抱える子どもをどう理解し、どう支援するか?』 米澤好史 著 福村出版

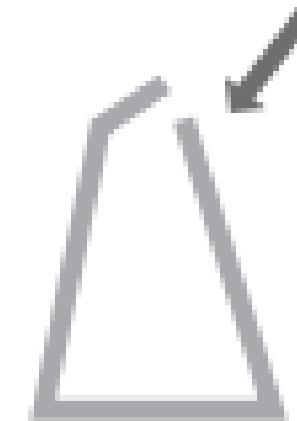
「愛着の器」モデル



a. 底が抜けている
て愛情が貯まらないタイプ



b. 器がなくて愛情が貯まらないタイプ



c. 愛情を受け取る口が小さく閉じるタイプ



d. 安定的な器があるタイプ

愛着障害とADHDの共通点と違い

『発達障害・愛着障害 現場で正しくこどもを理解し、こどもに合った支援をする「愛情の器」モデルに基づく愛着修復プログラム』 米澤好史 著、福村出版

■項目	愛着障害	ADHD
■多動性行動障害	ある	ある
■ハイテンション	ある	ある
■不器用で整理整頓が苦手	ある	ある
■けんか	ある	ある
■ADHDのタイプ	不注意優勢型が多い(解離があるために不注意の項目を多く満たす)	混合型が多い
■多動のムラ	特に午前中は抑うつが強く、夕方からハイテンションになる	一日中ほぼ同じ
■対人関係	逆説的で複雑	単純で素直

愛着障害の特徴(安心基地を求めて)

1 多動の現れ方

- ・感情と関係するので、ムラのある多動

※A D H D はいつも A S D は居場所感を感じているときは多動ではない

2 物との関係

- ・物を触ることで安心基地を求める（歩くときも机や壁に触りながら歩く）

3 口の問題

- ・安心基地を求めて持っている物を口に入れる（指を口に入れる、衣服やハンカチを舐める）

愛着障害の特徴

4 床への接触

- ・包まれた安心感より接触感を求めて、靴や靴下を脱ぐ（床に寝込んだり這い回ったりする）

※A S Dは知覚異常、知覚過敏のため靴や靴下の接触感を嫌って脱ぐ

5 人への接触

- ・ベタッと抱き付いたり、まとわりつくように過度の身体接触をする（脱抑制タイプ）
- ・近寄られることを拒否したり、前や後ろから近付かれることを嫌がったりする（横から少しづつ近付く）

愛着障害の特徴

6 姿勢・しぐさ

- ・姿勢がよく崩れる（後方にだらっと反り返ったり、机に突っ伏したりする）
- ・左右に身体を揺らしたり、前後に揺らし椅子漕ぎ状態になったりする

7 危険な行動

- ・物を投げる行動が多い（愛着の問題を抱える子どもが多い学級は物が飛び交う）
- ・不快感情を紛らわしたくて高いところに好んで登る

愛着障害の具体的特徴（外に現れる行動）

- 子どもが生活する子育て・保育・教育・福祉の現場で目撃する愛着障害の具体的な特徴として次のものがあります。
- いくつかが確認できる場合、その子どもは愛着の形成に課題があるかもしれません

モノとの関係

さわる必要のないものをさわる、モノに囲まれる

- 鉛筆、消しゴムなど机の上のモノに触る必要がないのに触る
- 顔、髪、手などの身体の一部を触る
- 服やズボンをさわる
- ポケットに手を入れる
- 壁や机を触りながら歩く
- ベッドの周りにモノをいっぱいおいて囲まれて寝たがる

口の問題

さわっていたものを口に入れる

- 鉛筆、消しゴム、机、ハンカチ、服などをなめる
- 舌なめずり、指吸い

床への接触

床に接触感を求める

- 靴や靴下を履くべき場所でも靴下まで脱いで素足になる
- 床に座り込む、寝転ぶ、這い回る、転がりまわる

人への接触

反応性アタッチメント障害型

- 人を警戒する、怖がるなど人との関係を忌避する

脱抑制型

- 誰彼なしに無警戒にかかわりを求める。何歳になっても抱っこ、おんぶ、膝のりなど強い身体接触を求める

姿勢・しぐさ

- 姿勢の保持が難しい
- だらしなく感じる着こなし、季節にあわない着こなしなど服装の乱れ
- 突然飛び上がる、走り出す
- 遺糞、遺尿

危険な行動

- モノを乱暴に扱う、モノを投げる、振り回す
- 身体の一部や衣服を噛む、相手に噛みつく
- 高いところに登る
- 泣けない
- 対人への暴力、暴言

(参考) 米澤 好史：愛着障害は何歳からでも必ず修復できる.合同出版.2022,pp60-72

愛着障害の子どもに「してはいけない」対応

- ・ 愛着障害の克服を支援していくに当たり、かえって愛着障害を強めてしまうおそれのある対応には次のようなものがあります。
- ・ こうした行動は避けるように配意しましょう

本人に理由や気持ちを尋ねる

- ・ 子どもが不適切な行動をした際の理由や気持ちを尋ねるのはNGです。
- ・ 感情の障害を抱える愛着障害の子どもは、自分で自分の気持ちが分からぬし、相手の気持ちもわからぬため、これを問い合わせられると自己防衛反応を示します。

追い詰めるように叱る対応

- ・ 愛着障害のある子どもを追い詰めるように叱っても防衛反応を示すだけ効果がなく、かえって解離症状や対親暴力、対教師暴力を誘発し得ます。
- ・ 叱る必要がある場面では「〇〇してはダメ」という叱り方ではなく、例えば「走ってはダメ！」ということを叱るなら「歩こう！」というように肯定的表現・前向きな提案の形をとります。

腫れ物にさわるような対応

- ・ 何をしても叱らない、子どもの命令、支配に従うだけといった対応はNGです。
- ・ 愛着障害の子どもは自己高揚が増大し、命令や支配がエスカレートします。
- ・ 相手が命令に従ったとしても、次の命令に従う保証はないので、愛着障害の子どもは安心することができず、命令がエスカレートします

褒めればいい、甘えさせればいいという対応

- ・ 愛情欲求行動がエスカレートしてしまうためNGです。

関わる人の無連携な対応

- ・ 支援者がそれぞれの思いで勝手に関わったり対応するのはNGです
- ・ 愛着障害の子どもは「1対多」の状況では安心感を持って関わることができません。「特定の大人」を決め、「1対1」で関わることができるよう連携していくことが必要です。

受容・傾聴・向き合う対応

- ・ 要求を無条件に受け入れる、ひたすら傾聴する、相手の真正面に立ち位置をとて子どもと向き合いうのは、感情が育っていない愛着障害の子どもにとってはどのように受け取っていくかわからず混乱するためNGです。
- ・ 愛情欲求行動や支配、命令がエスカレートする恐れがあります

無視する対応・取り上げない対応

- ・ 愛着障害の子どもは、愛情欲求が無視されたとらえ、余計不適切行動が増えてしまう恐れがあります。

(参考) 米澤 好史：愛着障害は何歳からでも必ず修復できる.合同出版.2022,pp128-140

片づけが出来ない、ルールが守れないように見える

ADHDの場合は、実行機能・遂行機能の問題があるために「片づける」という一連のいくつかの行動を最後まで行うのが困難で、「片づける」行動が中々身につかず、「片づけられない」という現象につながる。

対応：「片づける」行動を細かい行動に分解し、スマールステップで行動支援をする。
⇒ スキル習得

愛着障害の場合は、このような支援ではまったく効果が見られません。それは、愛着障がいの場合は、「片づけた方が気持ちがいい」という感情、「片づけたい・片付けよう」という意欲が育っていない。

対応：「片づけたら気持ちいいね」「片づけたらきれいなってすっきりしたね」と片づけた後の感情に働きかける。 ⇒ 感情学習

「できたら嬉しい」という感情は自分ひとりでは感じることはできません。これは、誰かに認められるという経験、誰かとの関係性の中で感じる感情です。感情学習はひとりでは、できません。

『愛着障害は何歳からでも必ず修復できる』米澤好史 著 合同出版

「間主観性」 相手の気持ちを察し、情動的な一体感が成り立つ。生後5~6週間後からみられる。

「主導権を握る」 大人がリードする

「特定の人が変わった時は、本人の目の前で変わることを説明する」

14 自閉障害と愛着障害の共存型タイプ

①籠もるタイプ

- ・室内でフードや帽子・タオルを被る、マスクを着ける、カーテンやロッカーに隠れる（安全・安心基地の欠如と居場所感の危機）

②攻撃行動をするタイプ（男子に多い）

- ・突然目つきや表情が豹変し、感情的変化が生じることで起こる攻撃（ある子の顔を見た瞬間、ある言葉を聞いた瞬間に嫌な思いが溢れて激高する）

③固まるタイプ（女子に多い）

- ・何も受け入れない、何も言わないので、一時的に周りをシャットアウトする

IV. 愛着障害のある子どもの対応

1. キーパーソンの決定

「特定の人」、すなわち、その絆を結ぶ最初の相手である「愛着対象」を決めてから支援をすることが必要です。誰もが勝手にかかわると、刹那的なかかわりの快感だけも求める「愛情のつまみ食い」を起こしてしまう。

2. 1対1で一緒に活動をする

キーパーソンの大切な役割は、感情がきちんと育ってない愛着障害の子どもの感情をはぐくむことです。誰かと一緒に何かをして、その時に感じたことを一緒に共有して、初めて感情の存在に気づくのです。

3. 感情のラベリング支援による感情学習

うれしそうな顔をしているからよかったですなどの感情を放置していいわけません。「今、どんな気持ち？」と問うてはいけません。これは、子どもの感情に期待した対応です。「〇〇して楽しいね」と感情を言いあてる。

4. キーパーソンが主導権を握る「先手」の支援

「これしよう」とキーパーソンが先手、主導権をとって、一緒に活動に誘うことが大切です。「〇〇と何したい？」と子どもに聞いてしまったら、主導権を子どもにあずけてしまい、その後の活動は逆効果となります。

5. 主導権を握る「叱り方」

「〇〇してはダメ」という叱り方は、後から先にしたことを全否定する「後手の正面否定」です。「走ってはダメ」ではなく、「歩こう！」です。

受け止め方の支援をする

1 感情のラベリング支援

- ・「相手の気持ちが分かる」と聞かれても難しいので感情は問わずに教える
- ・何をしたら（行動）、何が起こって（認知）、どんな気持ちになったか（感情）をつなぐ

例：ジャンプしたら（行動）、手が天井に届いて（認知）
すごくうれしいね（感情）

- ・行動・認知・感情をくっつける接着剤の働きをするのが愛着対象

「〇〇先生と一緒になら～できてうれしかったね」
という言葉掛けが愛着形成の魔法の言葉

愛着障害・
愛着の問題を抱える
子どもを
どう理解し、
どう支援するか？

米澤好史

福音館書店

愛着アセスメントツール

- 外的な評価
- コード記述
- セット内容

子どもとかかわる
すべての方必携のツール！

- ①子どもの気になる行動をアセスメントシートでチェック。
- ②行動の原因や理由を分析。
- ③アセスメント結果に応じた、適切な支援・実践的なアドバイスを提供。
- ④保護者、専門家、施設などの関係者が活用可能。

68
セイドウ



株式会社セイドー ブックス

アタッチメントがわかる本

「愛着」が心の力を育む

東京大学出版会
遠藤利彦



子どもの発達を支え、感情を整える

「不安なときに守ってもらえる」という確信が心の力に。
アタッチメントの形成から生涯にわたる影響まで解説！

やさしくわかる! 愛着障害

理解を深め、支援の基本を押さえる



米澤好史 著

ほんの森出版

事例で
わかる!

愛着障害

現場で活かせる
理論と支援を



米澤好史 著

ほんの森出版

必ず修復できる
は 何歳からでも

ほんの森出版
著者:米澤好史

愛着障害

ほんの森出版

○愛着障害があるかどうかの見分け方(私案)

- ・多動の状況を丁寧に見る(ムラがないかどうか)
- ・注意や褒めた時の感情の反応を見る(素直さがあるか)
- ・大人や子ども達との関わり方を見る(人によって関わり方に差がないか)
- ・家族状況を把握する(経済状況、兄弟の人数、病気や障害のある人が家族にいないかなど)
- ・本人と母親、父親との関係性を見る(特に母親)

* 家族(歴)アセスメント ジェノグラム(家族図)の作成 エコマップ
⇒多角的に客観的に子どもの置かれている環境を把握する

「子どもが苦境に陥るのは、ストレスを和らげて自分を守ってくれるものがないと感じているからだ」

「信頼できる大人がつねにそばで見守っていないために、逆境を乗り越え、対処方法を学ぶ機会がない」

「日常生活で家族以外の信頼できる大人が身近にいれば、子どもは自分を信じ、自分には長所があると信じられるようになる」

『小児期のトラウマがもたらす病』ドナ・ジャクソン・ナガサワ著
清水由貴子 訳 PAN ROLLING

課題の世代間連鎖の構造

表面上の課題

アルコール、薬物依存、DV、虐待、自殺
リストカット、不安障害、うつ病、統合失調症
摂食障害、不登校、非行、いじめ など

課題の
世代間連鎖

自尊心の低下

愛着障害 ⇒ Trauma

親と本人の病気・障害

貧困・過保護

虐待・DV

相互行動・昇進化現象として現れる愛着障害の特徴

多動・ モノとの関係	相補行動	髪の毛を抜く（抜髪・抜毛） ゲーム・ネットなどをして離れない（ゲーム依存・ゲーム障害） 性的問題を起こす（本人に性的な意図、意識がある）
	発達の脆弱性・ 精神的脆弱性	万引き・窃盗（クレプトマニア） 性器いじり・性的化行動（本人には性的意図はないが、結果的に性的な行動に見えるもの）
モノとの関係・ 口の問題・危険な行動・ 愛情欲求・自己防衛	自己評価の 低さ	摂食障害（過食・拒食） リストカット
姿勢・しぐさ	高不安・ 高緊張	チック 吃音

○愛着形成が十分にできていないと

- ⇒ 落ち着かない、集中できない、友達にちょっかいを出す
- ⇒ 学習意欲が十分に湧かない
- ⇒ 集団に所属することが難しい

- ⇒ 小学校3年生くらいから不登校(傾向)になる傾向がある
- ⇒ 小学校高学年になると年上の異性に关心を示す傾向がある(特に女子)
- ⇒ 中学生になると非行行動をとる傾向がある

*年齢・学年に関係なく、本人に応じた愛着形成の
やり直しが求められる

○集団教育と個別教育、支援の考え方

- ・個々の欲求レベルに合わせた教育、支援と居場所づくり
- ・個々にニーズと状況に合わせ合理的に配慮、対応する

従来の考え方



これからの考え方



<本日のまとめ>

- 愛着障害と発達障害からくる子どもの行動は類似しているが、その要因と対応は大きく異なる
- 対応を間違えると子どもたちに負の体験を積み重ね、傷つけてしまい、人を信じる力を低下させてしまう
- 自尊心の低下は、将来の生き方に負の影響を与える
- 子どもに関わる仕事をする人は、より高い専門的な知識とスキルを身につける必要がある